



許斐岳城にみる戦国時代の山城の様相

『新修宗像市史』中世部会から

許斐岳城の立地と構造

城のある許斐山(宗像市王丸、福津市八並)は、旧宗像郡の中央部に位置する独立した山塊であり、南山麓には博多と芦屋を結ぶ江戸時代の唐津街道も走る要衝です。十六世紀後半、宗像氏と戦国大友氏との戦いの多くは当城を巡り行われています。

許斐岳城は、宗像氏が本城とした岳山(蔦岳)城に迫る総面積約九千平方メートルに及ぶ広大な曲輪群(駐屯空間)を有しています。そして、曲輪に繋がる尾根は、連続堀切や長大な空堀を設置し外部からの進入を阻む堅固な造りとなっています。また、城の用水池と伝承のある金魚池周辺には、長大な空堀とともに横矢掛(側面射撃を可能にする塁線の折れ)の構造もみる

ことができます。

許斐岳城が堅固な構造で大規模化した背景には、当城が、宗像氏にとって最も重要な防衛拠点であったことを示しており、在城者も、許斐氏等の近隣の有力家臣だけでなく、上八村郷衆の占部氏をはじめとして領内各地から動員されています。

また、「宗像社第一宮御宝殿置札」(中世Ⅱ五二〇の一)には、永禄十一(一五六八)年から始まる戦国大名毛利氏の九州侵攻において、毛利氏の部将小笠原兵部大輔が当城に在城したと記述されており、毛利氏が当城を筑前侵攻の拠点として利用したことも注目されます。同時期と考えられる年末詳七月十一日付毛利輝元・元就連署書状(中世Ⅱ五一五)からは、毛利氏の指示で普請が行われていることがわかり、当城が大規模化した

背景には毛利氏の関与も考えられます。

戦国期の山城の様相

(城内の区画を示す「丸」・城中の作法)

また、当城に係る史料からは、

明な部分が多い当時の城の様相を垣間見ることができません。永禄二(一五五九)年大友氏の後援を得た宗像氏の一族鎮氏の侵攻により大島に避難した宗像社最後の大宮司氏貞は、翌三年三月二十八日、大島を出て大友勢の占領する許斐岳城を夜襲し落城させます。この戦いの功績を賞する文書には、戦闘の場所が「詰丸」(宗像氏貞感状写中世Ⅱ四一四の二・三)或いは、「甲丸」(毛利隆元・元就連署感状写中世Ⅱ四一四の四・五)と記述されています。呼称は異なるものの、いずれも城内で最も重要な区画である「本丸」を指していると考えられます。「本丸」の呼称は近世以降定着したと考えられ、中世においては各地域においてその呼称が異なっていたことを示す事例でもあります。

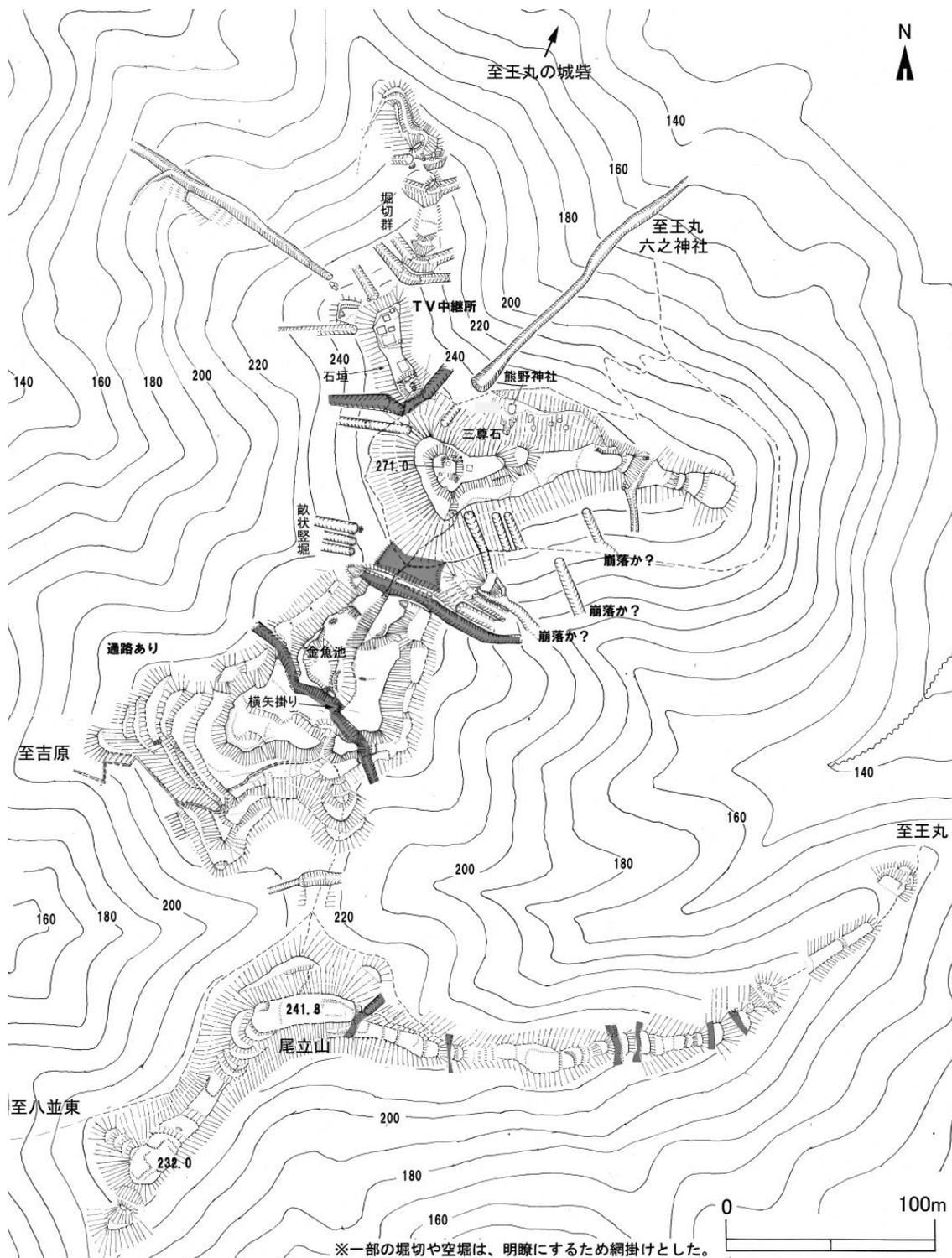


許斐岳城遠景(岳山城より)

さらに、「宗像記」(第七 占部尚持没落、并氏貞嶽山開城之事 中世II四一四の七)からは、当時の城の規則や警備の様子を垣間見ることができます。「城中の作法には、門木戸を西の刻(午後六時頃)より鑰かぎをおろし、其鑰どもを取上、朝の卯の刻(午前六時頃)に鑰を出して、門戸を開く、其上夜廻りの武士、所々番人しばらくも怠りなかりければ、中々左右なく窺ひよるべき様なくぞ見えたりける」とあり、城の門限の規定や城門の鍵が嚴重に管理されていた様子が書かれています。また、永祿三年の氏貞による許斐岳城の奪回が夜襲により行われたように、最も危険な時間帯である夜間にも警備のため要所に番人が配置されるとともに、武装した兵士による巡回が行われており、夜通し嚴重な警備が行われていたとあります。

※(中世II No.)…宗像市史編纂委員会『宗像市史』史料編 第二巻 中世II、宗像市、一九九六年

(中世部会 藤野正人)



※一部の堀切や空堀は、明瞭にするため網掛けとした。

許斐岳城縄張り図 (藤野正人作成)